

風土



笹子鳴く

神蔵器

葱買ってこれや五分の渡し船

雲雀より大河をのぼる笠智衆

お見舞に吉祥天女の守札

一つとや一つとどろく良寛忌

霜柱いま病むことは一大事

寝返りを打ちて冬ばら燃え立たす
約束無し妻の墓前に冬たんぽぽ
足長蜂冬日にたどりつきて死す
大根の衣紋ぬきをり啄木忌
初音せり徹夜のつづく桂郎に
胸を刺す激痛寒の明けてをり
笹子鳴く桂郎・器めもじして



竹間集

同人作品



はこべら

岩木 茂

枯れ果てて蘆みづうみに寧らげり
大敷網に雨の日つづく春隣
漉き桁の行つたり来たり軒氷柱
立春大吉卵の黄味の盛り上がる
はこべらや五寸に足らぬ瞽女の墓
敷網のとぐる積みなる落椿
地虫宙づ小屋の時計が畑に鳴り

剪 定

相沢有理子

豪雪とテロのニュースや常世病む
雪焼けし帰国の記者と茶を喫す
採血終へにゆう麵に割る寒卵
寒雷の天地揺るがす夜となりぬ
はらからは皆逝き春を待つばかり
春夕焼け玻璃戸洗ひし水の綺羅
剪定の音にやすらぐ物干し場

年の豆

小林輝子

雪折れの杉の匂へる居久根かな
夜毎訪ふけものの跡の雪笑窪
年の豆熄まぬ夜雪へ打ちにけり
幾つもの訣れありけり寒明くる
かまくらの燭の曼陀羅を川の面に
飯の世の飯の一夜をかまくらに
靄込めの日輪杉の花粉とぶ

家系図

田村すゝむ

春めくや足音違ふ右ひだり
誕生の二月神蔵器選
仕立屋は亡母の生業針供養
春風と少し遊んで帰りけり
青き踏む今日も一句を追ひ続け
本陣の座敷を占める御殿雛
家系図も遺言の一つや涅槃西風

春寒

塩田博久

綿雲の空に眩しき雨水かな
茶屋町や出格子濡らす春時雨
春陰や文士墓前に巻煙草
春寒や机の裏に本落す
卒業期「学生時代」口の端に
ジョギングは池を三周柳の芽
海苔干すや八景島をまなかひに

初音

田中佐知子

ゆるゆると酩摺り唄や春の雪
花のごとき甌の縄目初鶯
初音かな大吟醸の蔵開き
十一代源兵衛「神聖」春の雪
淡雪や利き酒に身のゆるびみて
芽柳のあはあは十石舟乗り場
太々と酒屋格子や日脚伸び

春光

工藤ミネ子

二ヶ月やことのはつむぎ歩く児よ
散り敷ける夜泣きの椿触れ合はず
ファックスのふいに紙吐く多喜二の忌
お手玉の鈴のつまづく春日向
聞き役に徹す春光部屋深く
水平線弧を大らかに暮れかぬる
囁りや笑みをかすかに西施像

春のまち

柿沼 盟子

書店へと帰途まつすぐに春の夕
新刊の平らに積まれ春灯
春寒や柵二巡して選びかね
本屋にもポイントカード春手套
近火見舞ひ述べて買ひける春みかん
春みぞれ釣銭もらふ傘の内
ト口箱の積まるる朝や涅槃西風
駐輪場の一日券や雀の子
春雨やわが影はづむガラス窓
商店街抜けて燕の巣は駅に

山河集

同人作品



神蔵 器選

早春や人語容れざる雑木山 生田 作

日に当てて骨ぬくめぬる二月かな
津山盆地城軸として冴返る
破顔してをとこ春泥ためらはず
牡丹雪降る静けさを見てをりぬ

春浅し小物の増ゆる旅仕度 生田恵美子

山葵田の車窓に暮るる天城越え
河津てふ川の名前の花堤
金せん花百八十度海の紺
猫やなぎ帰り路父母の墓訪はむ

連山を抑へ二月の松本城 鈴木庸子

水温む太鼓橋より城に入る
階狭き天守へあがる余寒かな

ストーブを囲む多国語白馬駅
石落とし覗く櫓や冴返る

山焼を待つ青空をまだ残し 雨宮 桂子

山焼の御神火ひとつ駆けのぼる
雪吊や百万石の花咲かす
山門に入る立春の永平寺
春あられ満ちて百万石通り

東京駅百年記念風花す 遠藤道遙子

総持寺の長き廊下の余寒かな
白魚舟まづもてなしの躍り食ひ
佐々木邦の老いらくの恋春時雨
猫柳光り初めたる最上川

◇特別作品◇(抄)

盤寿茫茫

豎山 道助

学問を捨て暖かき家となり
今日逝きし如くに修す龍太の忌
黄泉に行く参道はなし涅槃西風
革命は一句にて足る草城忌
囀りや健三郎と慎太郎
逃げ水も征も追はぬ盤寿かな
春宵を商品としてマルクス忌
涅槃図の宙にシュレジンガーの猫
初夢の兜太にノーベル文学賞
打初めの初手天元の力かな

風土集



神蔵器選

日輪に雲ななめや大試験 津山 生田恵美子

挨拶の増ゆる門先下萌ゆる

ものの芽の屈めば風の通り道

春の雷こけしが一つ横向きに

日に数度鐵路響けり葦の角

戦艦に二疊の茶室クロツカス

白魚の水とならざる眼が泳ぐ

新しきテールブルクロス春たちぬ

半生を異国の教師クロツカス

立春の窓より入れるピアノかな

はんなりと京にしぐるる西行忌

春立ちぬ満月ほつこり昇りくる

ひとり旅糺の森に春しぐれ

汕頭トウのハンケチ胸にクロツカス

白梅の咲きて浄土を近くせる

津山

生田恵美子

川崎

豎山道助

東京

川田好子

春北風や波一方に寄せらるる 大分 工藤はるみ

下萌や草原にはや牛集ふ

春浅し細身の月の落ちさうに

三寒にこもり四温の街歩く

草萌ゆるすぐにとけたる靴の紐

かたかごや働く人のたなごころ

神殿の奥に雛壇灯りをり

海苔むすび大一番の子に握る

胸に挿す生徒手帳や卒業す

早春の水で洗ひぬ膝小僧

西行忌梅の遅速を探りをり

玄関に豆残りゐる余寒かな

下萌えや土手登るとき手をついて

涅槃像顔に日当たりゐて寒し

日脚伸ぶ首よく動く鳩の影

大分

工藤はるみ

東京

中嶋陽子

神奈川県

石井秀一

悼養

冬菊や夫の形見の喉仏

京都

杉本葉王子

宮壁登麗

立雛の顔横を向く扇かな
湯豆腐や就活のこと恋のこと
白雲に届かぬまでも土筆伸ぶ
一面の田に祭り来る春の雪
手を合はず阿弥陀三尊冬の蝶

伊東

小松ひろし

早咲きの水仙届き仏前に
夕刊のあと雨あがる十二月
手のとどく高さを飛びぬ冬かもめ
十二月妻の包丁研ぎて置く
流行風邪そのまま二月に入りにつけり

川崎

井口ふみ緒

いつせいに寄りてこぼれて寒雀
その中に笑ひ羅漢や下萌ゆる
花びらの如き雪降る西行忌
少年のサッカー練習下萌ゆる
クロツカス港の見える診療所

相模原

岡 尚

春灯し松栄堂の漆文字
風花す東京駅の大時計
ワッフルとジャマイカコーヒー春立てり
代々の樂の茶碗や春兆す

一枚の空一枚の海冬かもめ

伊東

吉永すみれ

日だまりは母の懐つくしんぼ
風光る高原ガラス美術館
気負ひなき里の暮らしや野蒜つむ

早春の里を貫く川一本
金眼鯛の炙り飯てふ春の伊豆

津山

生田 作

石廊崎の海鳴り楯の木の芽立つ
梅東風や波音近き伊豆の宿
砂飛んで安房の岬の春怒濤

缶珈琲アクアラインに余寒あり
漆黒の麒麟の舌先寒に入る

藤枝

間島あきら

鉄を剪る音をくぐりて寒見舞
民芸館に喫茶コーナー福寿草
紅椿九十の手の「茶筌塚」

下萌ゆる星の広場の椅子十二
燧切り春の舞台へ送り出す

川崎

内藤 静

俳優の手形百ほど春時雨
囀や端の揃はぬ和紙の束
繋留の鎖あらはに涅槃西風

実朝の詠みたる海の白魚とふ
画仙紙を結ぶ紙縫や糸柳

横浜

下山田美江

四天王を四隅に手水寒戻る